

品格ある国 「日本」の科学技術政策



日本学術会議会長 黒川 清

百年前を想う。アインシュタインの「 $E=mc^2$ 」は、四十年後に原子爆弾開発、今の日本の電力の三〇%が原子力。ライト兄弟の十秒、四〇分の初飛行、六十六年後には月に到達、今や東京―ニューヨークは十時間。先進国で四十歳に達した出生時余命も今は八十歳、地球人口は百年で十六億人から六十四億人に。交通と情報手段の急速な進歩は、世界を狭くし、瞬時の情報共有を可能にし、経済も産業も政治もグローバルとなる。二十世紀の科学技術の進歩には、世界規模競争が百年持続し、大量の国家投資が行われたことがある。

二十世紀までを振り返り、二十世紀の課題は何か。それは①さらに増え続け二〇五〇年には九十億人に達しようとする地球人口②人間生活圏の拡大、エネルギー、食料、水等の需要急増、廃棄物増加等による地球環境問題と温暖化、そして③南北の格差の拡大だ。地球人口の八〇%は、低開発と開発途上国にあり、生活の余りの不公平さに不満は募る。科学技術は、これらの地球規模の課題にどう貢献できるか。

二十世紀の後半、冷戦と日米安保の枠組みで経済成長した日本の二十一世紀の課題は何か。地球人

口の六〇%を擁し経済成長するアジアと、「グローバル化」での課題である。二十一世紀のパラダイム（枠組み）を世界が模索し、ヨーロッパは統一を模索する。近代日本の歴史を振り返れば、日本の課題はアジアでの信頼構築だろう。経済だけでなく、国の「品格」である。アジアで信頼されない日本をヨーロッパやアメリカ大陸が信頼するか。どんな人と付き合いたいかを考えれば理解できる。

目標は、どこに置くか。二〇五〇年か。そこへの道のりへの課題を考え、二〇二〇年への行程を戦略的に考え、三段階の五カ年計画の政策を描く。五年毎の到達点を設定する。ベンチマークできる。科学技術政策も例外でない。これが国家の戦略的政策の立案と実施行程なのだ。二〇五〇年に還暦を迎える人は現在十四歳、五十歳を迎える人は四歳。この年代がこの十年に受ける教育を想像してもらいたい。科学も科学技術も全ては「人」次第なのだから。

なぜ二〇二〇年か？十五年後だ。では、十五年前は？ベルリンの壁が落ちた。二年後にソ連邦消滅。天安門事件があった。今の中国はどうか。「Japan as Number One」だと？日経平均株価は最高の三万九千円、翌年に二万円台へ。

今はどうか。十五年後の目標設定は、リアルなのだ。しかも、世界は今まで以上に早く、ダイナミックに動く。

国の目標が見えれば、教育も、人材の育成も、科学技術も、この目標への「手段」と理解できよう。地球環境への科学技術の創造である。経済とも背反しない。持続可能な地球人類社会へ貢献する科学技術。バイオ、IT（情報技術）、ナノ、化学等、全てがここへ収斂する。そこでしか企業は生き残れない。将来の地球世代への責任を果たす日本こそが目指す国家像だろう。そう、持続可能な地球人類社会を構築する人を輩出する品格のある国。人をひきつける「ソフトパワー」の国である。

くろかわ きよし

一九三六年生まれ。一九六二年東京大学医学部卒、一九六七年同大学院修了。南カリフォルニア大学医学部内科准教授、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）医学部内科教授などを経て、一九八三年東京大学医学部第四内科助教授、八九年同第一内科教授。東海大学医学部長、同総合医学研究所長、日本学術会議副会長を歴任。二〇〇三年より現職。二〇〇四年より東京大学先端科学技術研究センター教授（客員）、東海大学総合科学技術研究所教授（非常勤）。